第三百九十四回　青葉会

平成三十一年二月二十八日（木）午后一時半～四時半　文京区民センター会議室

〈選者〉
◎川口孤舟

〈出席者〉
今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川口孤舟　久米五郎太　小西弘子　豊田ゆたか
中野一灯　山崎亜也　山内天牛

〈投句〉
伊賀山そらお　小早健介　朱牟田恵洲　土谷堂哉　星田啓子　古田昇　宮内規雄
山田けい子　渡邊盛雄

〈紙上選句〉
赤田堅　安部眞希子　楠田彦十　在間千恵　庄司龍平　高橋敏郎　早川允章
福島正明　星田啓子　松崎浩　村田くに子　山本三恵

《互選句》

七点
◎上総ゆく汽笛尾を曳く花菜風　一灯（猛・孤・弘・ゆ・允・正・亜）
◎やはらかき風と戯むる吊りひひな　けい子（眞・孤・千・灯・啓・浩・亜）

六点
公魚（わかさぎ）の跳ねて曙光にまみれけり　孤舟（紀・千・敏・允・啓・浩）
包み紙しっとり濡らし芹届く　仝（猛・彦・正・亜・天・三）
◎南座へちよつと気取りて春ショール　けい子（眞・猛・孤・彦・ゆ・亜）
ひとたびは捨てしふるさと雪解川　孤舟（五・弘・龍・灯・允・天）

五点
播磨屋一門の「熊谷陣屋」
凄み冴え至芸たっぷり吉右衛門　紀久男（眞・敏・ゆ・正・天）
慟哭のごと流氷の軋む音（根室）　孤舟（千・灯・允・啓・三）
◎春先やベビーカーまたベビーカー　弘子（眞・忠・孤・千・天）
◎紅梅を嗅ぐと言ふ母抱き上げぬ　堂哉（忠・孤・弘・ゆ・亜）
◎古タイア積む草萌の運河べり　一灯（孤・彦・ゆ・啓・三）
◎単線の交換待ちや浅き春　亜也（堅・眞・孤・灯・天）
酒蔵に長寿の集ふ初句会　盛雄（堅・眞・龍・允・正）

四点
紅梅を手折りて幹も紅と知る　啓子（堅・紀・猛・千）
打ち捨てし庭の一隅蕗のたう　亜也（堅・紀・正・啓）

三点
◎レコードの音部屋に満ち外は雪　そらお（孤・敏・灯）
すめらぎへお疲れ様と春の雪　紀久男（忠・五・龍）
大いなる夕陽を沈め焼野原　孤舟（堅・灯・浩）
畑一枚四角く焼きて煙立つ　弘子（忠・五・天）
探梅は妻が遺愛の杖任せ　恵洲（紀・敏・允）
枳殻（からたち）の刺（とげ）差し交す余寒かな　堂哉（五・啓・亜）
◎天空に煌めく霊峰春立ちぬ　ゆたか（猛・孤・五）

二点
春寒や訃報相次ぐ傘寿前　紀久男（猛・敏）
春旅やメルボルンに立つ稚児二人　忠彦（紀・龍）
アネモネを包む英字紙風もなし　五郎太（忠・三）
梅散るや二二六の記事見えず　仝（彦・龍）
のどけしや水琴窟に聴き入りぬ　健介（堅・三）
天界を旅する友垣梅開く　ゆたか（紀・五）
◎玄関のマット萌黄に春迎ふ　一灯（孤・敏）
平穏な日々の発熱建国日　盛雄（紀・弘）
雨音のリズムに乱れ春寒し　仝（紀・浩）
どーんと蟹境港の妹から　天牛（彦・龍）

三寒の四温を待つ日永からず　猛（紀）
年毎に豆撒の声へりにけり　仝（正）
譲られて複雑な気分冬電車　仝（忠）
帰国した夜中の歓迎浮かれ猫　忠彦（弘）
入院の孫も見てるらむ二月の雪　仝（三）
二月尽代変はり待つ天皇家　五郎太（紀）
春の空夢持ち帰れ玉手箱　健介（紀）
白梅のふっくら湯島の天神さん　弘子（天）
紫のスイートピー添へ伯母送る　仝（紀）
『はやぶさ２（ツー）』りゅうぐうに着く　春吉報

無口なる茶房の主や二月尽　仝（彦）
ひと挿しの茶の湯の世界利休梅　恵洲（天）
故郷（ふるさと）の磯の香寄せる春の波　ゆたか（紀）
◎春の湖エイトの水脈の真一文字　仝（浩）
春風に黒潮の香や溶岩（らば）の磯　一灯（孤）
家猫と野良猫の窓越しの恋　仝（弘）
雪纏い怪我得し友の見舞する　昇（紀）
妻憶ふ薄氷（うすらい）消へてゆく時に　啓子（紀）
デジタルに頸振る鶏や春の昼　規雄（ゆ）
節分の豆買ひ忘れ買ひに行く　亜也（紀）
春寒や長患いの妹逝く　天牛（千）
バレンタインデー夜更けて　仝（紀）
嫁のチョコレート　仝（忠）

＊　＊　＊　＊　＊

●次回青葉会
三月二十八日（木）　午后一時半～四時半　文京区民センター
当季雑詠五句　投句二句

以上文責　紀久男

平成三十一年二月青葉会報

一今回は現役の亜也さんら１０名出席。投句８名。猛さんの進行で御覧のように名古屋から投句のけい子さん、一灯さん、孤舟選者が高得点でした。

（一）盛雄さんの句集「帰り道」の眞希子さんの選評と孤舟選者の厳しい句評

（口語と文語入り交る仮名遣いの間違いを指摘）

（二）眞希子さんからの万里子先生の近況と選句（三）河島彦明さん（昭和３５年入社・合成樹脂）所属結社「泥風会」合同句集（中山芳博さん遺句も掲載）

（四）「海」（二月号掲載）昇さんの「俳句月評」コピー等を回覧しつつ、弘子さん寄贈の金沢の「くるみ」最中、亜也さんの純米生酒「肥前蔵心」（佐賀・鹿嶋）、小生持参（盛雄さん寄贈）の冷や卸し「白雪・富士山麓」を賞味。

二　関係者近詠

冬ざれや関門にぬつと潜水艦　眞希子
皺深き手にて丸めて餅の美し　〃
待降節寸暇の指を鍵盤へ　〃
冬晴へ家も屈託も放ちけり　〃
顔見世の巳之助肩より踊りだす　弘子
人の上を泳ぐかに行く大熊手　〃
大黒天撫でては声張る熊手売　〃
畳屋の奥まで入る日十二月　〃
湯気当てて母の巻き取る痩せ毛糸　〃
寒鰤煮くずれぬてなほ鰤　青史
鍬の柄に凭れ冬耕了へにけり　〃
区役所の径の西側葱畑　〃
お目当ては顔見世土産の京佃煮　紀久男
絵手紙をはみ出て画（えが）く次郎柿　〃

裸木に森番の靴吊られをり　長谷見敏
―「２０１８俳壇年鑑」（本阿弥書店）―
懸案事項抱えたままの花見かな　正明
結論を急がせている花吹雪　〃
解（ほど）けない別れの握手花の冷え　〃
魁けて椿一輪紅深し　允章
地酒提げ友のふらりと春の宵　〃
陽光の野面を奔（はし）る水の音　〃
夕餉時噺家も買う春キャベツ　彦十
恐竜の眠る丹波路しぐれ雲　盛雄
すめらぎの余生は白し鶴帰る　〃
雪雲を負ひて大富士眠りけり　健介
今さらに平凡が良し浅き春　〃
幾星霜耐へてすめらぎ春の顔　〃
豪雪や彼は長距離運転手　紀久男
時雨るるや茶店込み合ふ東山　〃
眼福や山の湯宿の深雪晴（みゆきばれ）　〃
冬の汗玉三郎の人形振り（「阿古屋」）　〃
―「きさらぎ句会」―二月

ひらひらと星座へ昇る蛍かな　孤舟
グーグルで覗くわが家酔芙蓉　〃
火襷の壺に挿したるすすきかな　〃
啄木鳥のとんとん叩く心の扉　〃
少年に秘密ありけり通草裂け　〃

三「泥風句会合同句集」より小生好みを抄出してみました。

山に光里に温もり雪解かな　河島彦明
鳥曇舫ひしままの達磨船　〃
誇らしげに昼のニュースの開花告ぐ　〃
御食捧ぐ巫女の朱袴風光る　〃
子子（ぼうふら）の破調のリズムいとをかし　〃
若冲の眼に留まらずや羽抜鶏　〃
秋の夜の宇宙通信句会かな　〃
朝寒や犬のいばりもそそくさと　〃
色白く太きが誉れ蓮根握る　〃

装へば妻美しき年賀かな　中山芳博
女正月助六寿司の土産かな　〃
三輪山の春風揺らす麺すだれ　〃
更衣旅にしあれば帽子買ふ　〃
そのままの余生がよろしバナナ食ぶ　〃
終戦日母戦ひを始めたり　〃
椋鳥の群れ空傾けて反転す　〃
能面の下の猪首やうそ寒し　〃
短日や庭師の鋏アレグロへ　〃
牡蠣割女背の子揺り上げ手休めず　〃

四増田明美の「ジョグ俳句」１月１９日放映Ｅテレ

枝の折れてなほひまわりの日に向かひ　三津五郎（俳号・一万尺）の激励句

平成三十一年三月十八日　紀久男記